

女と論理性にかかわる言説の仕組み についての一考察

Remarques sur la possibilité logique du discours féminin

横山 安由美
Ayumi YOKOYAMA

1. 論理性をどうとらえるか

「従順な」、「愛情深い」、「神経が細かい」などといった女性を特徴づける決まり文句の一つに、「女は論理的でない」という言説がある。『広辞苑』によれば「論理的」とは「論理の法則にかなっていること、りづめ」であり、本来主語は個々の「言説」や「思考の様式」である。拡大して、言説や思考の主体である「人」を主語とすることも可能だが、〈女〉を主語とすることは、女が本来的または恒常的に論理的でないことを意味するので、事実の認定はともかく、知的能力においてあらかじめ男女を差異化しようとする視線を孕むものであることを、初めに指摘しておく。

男女の性差が本質的なものであるとする本質主義の立場は、女性が本来的に非論理的であることを、脳などの気質的、機能的性差から導き出そうとするのだろう。ただし論理性を司るとされる左脳は、女性にもある。おそらく脳における男女差は、右脳・左脳の問題というよりは、むしろ脳の働きかたの違いに還元されるというのが『話を聞かない男、地図が読めない女』¹などの一般書の教えるところである。空間認知、言語、推理など個々の知的活動において、男性は脳の特定の部位を局所的に使用するのに対し、女性は脳全体を使用する傾向が高い。電話をしながらテレビを見ることができる。だがこれは女性がより論理的でないことを示すことにはつながらない。そもそも「先天的な」論理性を測定

し、数値化して男女間で比較することが論理的に可能だとは思われない。

構築主義の立場は、性差は本来的なものではなく、社会によって形成されたと考える。そういう意味で女性がより論理的でない事実があることを、もし実証しようとするならば、男女それぞれが口頭で発した言葉と書いた文章、その総体を取りあげて、非論理的な記述の発生頻度を数量的に比べるといった手続きが考えられるだろう。だが家庭や社会と、それぞれの発話の場所が不均等なうえに、それが記録化される頻度も同一ではなく、書いたものが保存されて公になる頻度もひとえに職種や社会的地位に拠る。いったいどの言説を男女比較のための公平かつ十分な量のサンプルとして抽出しうるのか²。女性が発した言葉の記録そのものが、あまりに少ないのである³。

また何をもって論理的と判断するのか。思考の筋道が明確であることか、判断の根拠が相当であることか、用語の使用が文脈に適っていることか——いずれもしかるべき訓練によって獲得しうる「技術」ではないのか。一例を挙げよう。法科大学院を受験するにあたって、受験生は、各大学の入試とは別に「適性試験」を受験しなくてはならず、その主要科目の一に「論理的判断力」がある。日弁連法務研究財団は、適性試験の実施団体としての大学入試センターの「適性」につき異議を唱え、実務者の集団である同財団が実施すべきであると主張し、別途財団が「統一適性試験」を実施した⁴。ある程度「本来的」とイメージされ、専門分野の知識と直接関係ない能力を問う試験だからこそ「法曹養成と無縁の存在である」大学入試センターが実施してもよいのか、それとも法曹の論理性は法曹の実務者集団でなくては教育・判定できない性質のものなのか。論理性の本来性と後天性の二側面が争点の一つであり、問題は更に「本来的なる能力」を国家レベルで管理することの是非という方向へ発展する⁵。私見では、分野に

関らず万人について判定しうるような「論理性」、つまり「物事が筋道立てて考えられる」力は、最低限の社会的活動を営めるか否かの判定には有効だが、およそ専門職においては積極的意味をもたず、法曹や学術の分野であれば、当該分野についての十分な知識と立体的な経験なしには把握できないような高度にして複雑なコンテクストの理解と第三者的説得力をもつコンテクストの自発的な構築能力をこそ、問うべきであろう。

「論理性」の語がさまざまな相を含むことをことわったうえで、論理的判断能力という一般的な意味でこの語についての検討を継続したい。もし人が環境の影響を受けて論理性を失うとするならば、その理由は家庭環境、教育、マスメディアなど多岐にわたる。とりわけ義務教育課程で課される「作文」において、論理的構成や説得力よりも、情緒的、印象主義的な記述が評価される日本の国語教育の問題は看過できない。だが、社会によって、「女性が男性よりも」論理的に劣る、という認識ないし実態が形成されるということならば、その最大の原動力は、「女は論理的でない」という言説以外にありえない。長い間「女」は行動や判断や欲望の「主体」から遠ざけられ、男性社会の発する言説の「主語」としてのみ根付き、顕れてきた。やがて、言説の中にしかなかったはずの〈女〉が、生身の体をとって、市街を闊歩し始める。非論理的で感情的な女が。なぜ彼女らがこうした属性を自ら引き受けるのだろうか。自分を含めて、問わずにはいられない。

女にとって、「女」を主語とする言説を聞いたり発したりする行為は、身体を通した主体としての自己認識と不可分である。それ自体偏見めいた言い方になってしまうが、男という主体よりも、より不可分であろう。女の方がより身体性に従属していると巷間で語られ、それを私たちが受け入れているからだ。とりわけ出産・育児という女性の身体的かつ社会的な機能と関連して創出された「女は愛情深い」「人のケアを好む」などの言説は、身体が

「自然」であることに必然的に伴う本能のようなものとして理解されがちである⁶。

私たちは、自分が身体的に女であると認知するその瞬間に、社会が提供する〈女〉にまつわるさまざまな言説を無意識かつ日常的に受け入れてしまっている。「女」という主語が世間にあふれているからだ。「女性は甘いものが好き」「女性の健康指向」などの言説は、実のところ市場にとって女性購買者層が消費者として有望である以外の何の存在理由も科学的根拠もない。女にとって、好悪や是非はあろうが、「女は非論理的だ」を受け入れるのも、感覚的にはそれほど難しくはない⁷。受け入れた時点で、無意識の領域に、自分はデフォルトで非論理的であるということがインプットされる。「非論理的」の意味がよくわからなくても言葉が在れば、自分はそうだと思い込む⁸。あるいはまた、フロイト以来「感情」と「論理」が対義になっているので（本来、「感情的」でありながら「論理的」であることは可能である⁹）、「女は愛情深い（＝感情的）」を受容する者は、自動的に「女は非論理的だ」を肯定している場合がある。比較のために言うと、「私は非論理的だ」を受け入れるのは、性別にかかわらず、総じて困難である。「私は」と言うためには、いったん意識を身体の外に取り出して、自己が判断の主体となって、自己と自分の発話の総体を、客観的かつ抽象的に叙述しなくてはならないからだ。

「私はケーキが好き」でしかなかった認識が、「女はケーキが好き」というメディアの言説を日常的に受容すると、「私は女だからケーキが好き」、「他の女もケーキが好きに違いない」という認識に変節していく。また、「なんとなく数学が難しい」という認識が、「女は数学が苦手」という言説に触れると、「私は女だから数学が苦手なのだ」という認識に変化し、文科系を志望することになる。科学論者トバイアスは「数学的適性に欠けると表明する」女性の割合が異常に大きいことを説明するために「数学嫌い」

Math Anxietyという用語を用いた。Anxietyという言葉を使用するのは、「数学的適性の欠如が一般に能力の欠如によるものではなく、むしろ、数学的能力への期待の欠如が、ジェンダーに基づいて社会的に強制されたものであることを示すためである¹⁰。」

女性としてのアイデンティティーを強くもつ者ほど、「私は」よりも、世間に流布する「女は」の述語を、親昵なものとして受け入れる。宗教や民族などのアイデンティティーが希薄な現代日本ほど、「女は〇〇」の言説が効果的に根付く社会はない。かつて女たちは、家父長制社会の強い規範のなかで、期待されて自動的に、あるいは身体的・社会的に強制されて、「子」から「妻」や「母」へと変貌したのだが、今日では、「女は妻である（のが幸せ）」「女は母になる（のが幸せ）」の言説が社会全体に飛散し、人々において内面化されることで、「妻」や「母」になるのである。ただし幸福は「文化的」価値ではない。——「私」には乳房や丸い腰がある、「私」は身体をきっかけに〈女〉であることを受け入れて、そして身体があるために〈女〉の所与について自ら問うことを忘れてしまう。この知的怠慢がもたらすのは、社会的、政治的、そして文化的損失にほかならない。

社会が与えた判断や認識を無意識的に受け入れて我が物とすることを「内面化」という。抽象的、精神的な営為のようで、実は身体的な作用である。ブルデューは行為者を規定している客観的な社会構造が内在化、身体化されて主観的な心的構造となることを「ハビトゥス」habitusと呼ぶ。例として男女間の身長差について考えてみよう。男性の平均身長は女性のそれよりも若干高いが、極端な差はないので、カップルによっては女性の方が高身長のことがある。他人がそうなのは構わない、人間は外見ではなくて中身である、などと考えていても、自分自身の恋人や夫が自分より低身長であることはどうしても受容できない人が多い。「生理的」「感覚的」に嫌なのだと表現するが、これも社会規範が内面化さ

れて身体化された例である。生理的嫌悪の実体は、大きくて力ある者と小さくて弱い者が「つがい」とならねばならぬという男女の「対幻想」¹¹と、そして、大小の二元論的イメージトレーニングの結果、自分の身体を通して「見て」実感する「小」のもつ象徴的な卑小さ、つまり社会的弱さ、無力さ、軽さなのである¹²。ブルデューのカビール社会（アルジェリア）の分析で知られているとおり、未開社会ではこうした大小、上下、左右といった二元的イメージの活用による男性支配が顕著にみられる¹³。日本では男性の高身長が「三高」という結婚条件の一つとして広く認知され、もはや身体的好悪をこえて社会規範として君臨している実態を、「洗練」sophisticationと呼ぶべきなのか、「野蛮化」barbarizationと呼ぶべきなのか、筆者にはわかりかねる。

本来「(非)論理的な」の被修飾語は表出された「言説」またはそれを統御する「思考」でしかありえない。論理性は精神の領域に属するものである。それを<女>なる生き物の属性として概念化し、言語実践を通してこれを受容させ、社会的に活用する。このあざとさをいまだに意識的に選ぶ者があるとすれば、そして実際にあるのだが、それは同時に彼自身の「主体」としての精神的・身体的問題性を現出させるに違いないし、また、その社会的な「目的」を問われてしかるべきだろう¹⁴。

本稿の目的は、桐野夏生を初めとする、あまり多くはない実際の女性による論理的発話を2, 3取り上げて、その論理性に対してどのような批評が行われ、どのように女性の論理性についてのイメージが構築されていくかを、限られた材料の中で分析、検討することである。

2. 桐野夏生における論理性と文芸評論

桐野夏生の短編小説集『錆びる心』の冒頭に収められている「虫卵の配列」という小説は、<私>と内山瑞恵というそれぞれ

恋愛に失敗した二人の女の再会と狂気とを描く。巻末の解説で中条省平は次のように指摘している。

ふたりの会話はきわめて明晰かつ論理的で、女は感情の生き物であるといったたぐいの紋切り型を完全に脱している。
〔…〕

だが、それにしても、と思う。いくらなんでもこの会話は、とくに元生物教師の言葉は論理的にすぎるのではないか。骨格がしっかりしすぎていて、かえって歪みを感じさせ、そこにはなにかうすら寒いものが忍びこむような気がするのである。そんな不安から読者は一気に切れ味するどい結末へと運ばれる。深みのある恋愛論、人間論、芸術論を含みながら、それらをすべて切って捨てる意外さに息をのまされる¹⁵。〔下線筆者、以下同じ〕

瑞恵らしいセリフを挙げてみよう。自宅にカメムシの卵のびっしりとつまった箱が送りつけられた。犯人は不倫相手の男ではなく、その妻だと推測しつつ、瑞恵はこう語る。

「わたしは大きな悪意の存在にめげてしまったんです。それまでのわたしは、卵が整列しているのも、生物界に不思議な法則性があるのも、すべて神様がしたことではないかと薄々感じていたんですね。それがわたしの根源的疑問であり、阿井さん〔恋人〕の疑問でもあった。でも、卵をわたしに送りつけてくるのは人間の仕業ですよ。そのことにわたしはこんなに傷つけられる。それがショックだったんです。とりあえず床に落ちた卵を片づけ、部屋を出ました¹⁶。」

瑞恵は、「どれほど」ショックだったかを述べる代わりに、「何

が」ショックだったのかを冷静に分析している。感情的でないのは確かだが、格別「論理性」に富んだセリフにも思えない。「法則性」、「根源的疑問」などの固い単語が目につくくらいである。瑞恵の他のセリフについても同様である。

おそらく中条は「とくに主人公の女性の言葉は論理的にすぎるのではないか」と書きかけて、「女性」が「論理的すぎる」という主語・述語関係のもたらすリスクを予感して、「元生物教師」という職種に置き換えたのだろう。その結果生じた「元生物教師の言葉は論理的にすぎる」の句は奇妙で、もちろん、「中学の生物教師」が論理的であることを不適切とする見解は聞いたことがない。もし生物教師の論理性について云々する意図はなかったと中条が主張するならば、逆に、「たとえ生物教師であっても、女性は、女性である限り、非論理的である」という確信がないと、この言説は成り立たない。少なくとも女性である桐野がこの文章を書いたのだから、現実にはこの程度に論理的な女が実在することはわかっているはずだろうに。仮に、論理的な女が実在しないとしても、フィクションなのだから、無いものを書いて構わない。

が、この解説の問題点は、解説者のミソジニー（女性蔑視）にあるのではない。小説としての価値を論じるべき「解説」で、ミソジニーを表明する「必要」がどこにあるのかという点である。本編の主題が、失恋の苦悩を通して女二人が互いを理解しあう、というようなものであったとして、そして、たとえば、過度に論理的なセリフの羅列が物語の情緒的な感興を損ねている、というような主張ならば、許容できただろう。だが中条の主張は、瑞恵たちが論理的なので、女性の登場人物として不自然であり、違和感を感じる、の一言に尽きる。「恋愛、人間、芸術」について紋切り型の描き方をしていない点も気に障るらしい。「いくらなんでも」という主観的な表現の一つにいたるまで、中条の解説文には主語がなく、当然のこのように「私」は「私たち」でありく

男>である。「私」が語るということと、<男>というジェンダーが語ることに区別がない。この部分に筆者は違和感を感じる。

桐野の女性像を「新鮮」だと言いながら、それゆえ桐野は「特異」で「個性的」だと評する。もちろん桐野が「論理的な女」を描くことをやめはしないだろう。だが、この一流の文芸批評家の解説を読んだ者は、一般読者であれ出版関係者であれ、やはり「女は非論理的」であると確認するだろうし、「特異」な桐野の垂流をことさらに自認する人物以外に、論理的な女を描こうとする作家は減少するだろう¹⁷。とりわけ不快なのは、男性が作った「女性らしさ」——しかも非論理性という明らかにネガティブな女性らしさ——を女性の作家が女性の登場人物に適用しなかったことへの不満を、中条という男性が、文芸評論という権力の場で、なんの躊躇もなく表現していることである。フーコー風の言い方をすれば、権力、知、主体の三点をもつ者の典型的な「しぐさ」なのである。

フェミニストの抗議などが念頭にあるのだろう、今日男たちは「女は感情的だ」とは言わなくなっている。代わりに「女は感情的だ、という紋切り型がある」と言う。後者の方がより暴力的で狡猾だ。面と向って「おまえは感情的だ」と言われれば、自覚に従ってイエスまたはノーと答えることができるが、そういう紋切り型があると言われては「ノー」と言えない。世間一般がそうとらえ、そう見ていることを、私個人の感覚を根拠に否定することは難しい。高度な論証能力が要求される。反論できずにいるうちに、やがてその一般認識が頭の中に植え付けられる。これは本質論でもなく、狭義の社会構築論でもない。「女は感情的で非論理的」という言説だけが存在し、それを発する者、受ける者、主語と自分を同一視する者、しない者、その者たちの言語実践を通して、個々の生体に何か投影され、同一化されていく。目に見えないせめぎあい私たちの身体という場で日常的に生じてい

るのである。

登場人物の類型として考えるならば、虚構作品において、現実にはない、あるいは現実に発生する頻度の少ない属性を登場人物に与える自由は誰にでもある。だが類型化への依存度は、ジャンルがより大衆的であればあるほど、つまり商業的であればあるほど高まる。読者の想像力や読解力の乏しさに配慮して、理解しやすい登場人物像をつくる必要がある。大衆の嗜好やファンタジーに応えるという大衆文学の一義的使命からしても、登場人物像は世間の一般的な認識に依拠することが望ましい。作家そのものがアマチュア化している青春小説を視野に入れて、小説の作り方をティーンエイジャーに指南する大塚英志の『キャラクター小説の作り方』は、「キャラクターとはパターンの組み合わせである」と述べる¹⁸。元祖手塚治虫がこれを「発明」し、既存のパターンを小器用に組み合わせるのが成功の鍵だと親切に説いて、これからの作り手にも推奨する。この限りにおいてサブカルチャーの主流はいつまでも紋切り型の再生産になるだろう。

類型的でない女性の登場人物は、男性のそれよりもさらに少ない。とりわけ日本の大衆小説では、主人公像は「美しく」「感情的」な女性へと一元化される傾向がある¹⁹。文壇の権威主義と出版社の商業主義は、著者たちに未来社会や宇宙戦争を描くことは許しても、現実の日本社会の紋切り型に反した女性を描くことには総じて抵抗する。牛山恵は「ジェンダーからの解放を目指す国語教材」の条件として次の4点を挙げている²⁰。

1. 筆者、作者が女性である作品
2. 女性の登場人物がいて、その人物の描かれ方が類型的でないこと
3. 男女の関係が類型的でなく、おたがいを認め合って共に生きる者であること
4. 男女の差別や役割意識の現実に対する批判的な視点に立つ

ものであること

だがこれらの条件を満たし、なおかつ社会的に成功する作品が日本に現れるには、かなり時間がかかるだろう。書評や文学賞の選考において、ジェンダーであれ、それ以外のことであれ、人間のあり方について自分のイメージと合わない作品を見たとき、日本の批評家たちが好んで使うのが「リアリティーを欠く」の表現である。多数派のイメージに忠実であることと、緻密な世界像のなかでその存在が真実味をもって実感されることとは、もちろん異なる。だが「批評」なるものがジャンルとして確立していない日本では、リアリティーの意味を検討する素養もない者たちが作品の価値づけを独占的に担ってしまっている。

全ての女性が論理的であることを男性社会が禁じているわけではない。男性社会がその価値を認め、仲間に入れることを公認し、自らも男性論理を受け入れたような女性〔ここで便宜的に名誉男性と呼ぶ〕であれば、論理的であってもよい。名誉男性たりうる女性像もまた類型化されていて、出自と外見が男性の嗜好に沿う者であることを、斎藤美奈子の『紅一点論』がたいへんうまく説明している²¹。その中にはスーパー戦隊シリーズの元祖、ゴレンジャーのモモレンジャーも含まれる。好んで偉人伝に取り上げられるヘレン・ケラーやキュリー夫人は上流階級出身の白人女性である。またミシュレはジャンヌ・ダルクの「民衆を統率するリーダーシップ、知的明敏さ、そして彼女の精神をして身体を統御する能力など」を強調して美しく描いたが、じつのところ、政治的意図にもとづいた彼自身の理想像の投影であると考えるのが一般的である²²。ともあれジャンヌ・ダルクはフランスの国家的理想を体現する存在であった。他方「内山瑞恵」は、日本の大衆向け短編小説の主人公で、しかも「勘違いしていて」、職も失い、最後に「狂う」女である。どこに論理性を付与する必要があるのだろうか、とく男>は考える。「論理性」は個人の知的実践ではなく、

男が社会参加を認める女に貸与する通行札なのである。その結果、日本の俗世間的文脈では、「論理的」の語は、もっぱら「女は論理的でない」と「女にしては論理的だ」の用例でしか使用されなくなっている。

桐野の長編小説『O U T』は、偶然夫を殺してしまった主婦とその仲間たち4人の女の行方を描く物語だが、作品は、「計画的・理性的」にではなく「衝動的・場当たりの」に動き出す彼女らの姿をそのままに提示している。文庫版の解説において松浦理英子は次のように説明する。

普通は近代小説の中の登場人物は、その人物の性格なり已むを得ぬ状況なりの一定の法則に従って、他人が見ても納得が行く論理性・整合性のある行動をとるもので、それが現実とはまた違った小説世界のリアリティなのだが、『O U T』のように登場人物を本人にも明確でない動機で動かせば、リアリティがないとか小説の作り方が非論理的で下手だとか判断されかねない²³。

だからこの手法は「思い切った」選択であり、そのような「禁則」のもとで、「雅子〔主人公〕が自分を縛る生活との訣別を果たすまで〔=O U T〕を行為を通して描ききる作者の手腕は見事というほかはない」というのが松浦の作品評である。評者一般が〈男〉で著者桐野が〈女〉であることを意識した戦略的な評価である。それでも『O U T』に寄せられる〈男〉の感想は、実にたわいないレベルであることを、桐野自身がインタビューで示している。

「『O U T』はずいぶん男性が読んでくれましたが、『主婦もモノを考えるんだね』という反応があったことは驚きでした。主婦もひとりの人間ですからモノを考えるのが当然なのに、

彼らはひとくくりに“主婦”という枠に閉じ込めて、それ以上のことを見ようとしません²⁴。」

「主婦」をひとくくりにした、というよりは、〈女〉は原則的にモノを考えないが、働いてモノを考えているような女性をその集合から外すと、残った集団の名前は「主婦」になる、という説明の方がわかりやすいだろう。

次はミステリー作家「柳原慧」を紹介するオンラインの記事である。

キレ味良いスタイリッシュな文体、理系的なプロットと中性的なペンネームから、著者は男性？ と思いきや、現れたのはハードロックな黒革ジャケットもよく似合う素敵な女性。それが、ミステリー界注目の新人、柳原慧さんなのだ²⁵。

文体からして記事の筆者は女性であろう²⁶。「キレ味良いスタイリッシュな文体、理系的なプロット」は原則的に男性的なものだという前提がある。女性の文体は「どろどろして感情的」だが、男性はビールか何かのように「キレ味良い」つまりさっぱりしている、と評者は考えている。「理系的なプロット」に至っては意味不明だ。初対面の相手に、「黒革ジャケットもよく似合う」と言う時の「も」は何なのか。本来女性には他の服が似合うべきだが、この人は「ハードロックな」服も似合う、という意味なのか。柳原さんは「男のような」(優れた)知的能力をもちつつも、外見はファッショナブルで女性としても素敵。こういう構造の賛辞を非常によく見かけるが、発するのは女性である場合が多い。男は知性、女は外見というクリシェはいい加減終りにならないものか。

映画の例を挙げて本節を終えよう。木下恵介を黒澤明に匹敵する映画監督とみなす人は少なくない。しかしながら、黒澤は内に古風

な武士道精神を保ちつつ「ダイナミックで西欧的な」作風をとったために世界に対する「日本の力」を感じさせるものとして日本で高く評価され、一方、「センチメンタルで日本的」な作風の木下は、「日本性」と「女性性」のゆえに恥ずべきものととらえられる傾向が強かったことを映画評論家石原郁子は説明している。

しかし、私が現在立っている時点からの遠近法で言えば、黒澤の作品のほうが評価が高かったのはたんに、評価の作業に当たった人々が黒澤ふう世界を高く評価する人々だったからにすぎない。その人々は、男性で、知識人だった（こう書くとすぐヒステリックに拒絶反応を示す男性が多いのでとても書きにくいのだが、現在までに黒澤・木下について書かれた評論の99%までが男性の手になるものであることは、フェミニズムの視点などを導入しなくても、当時の映画誌などを閲覧すればあまりにも一目瞭然の＜事実＞そのものだ。〔…〕もちろん当時女性批評家がまったく存在しなかったわけではないから、木下・黒澤作品を批評しなかったのは彼女たちの怠慢でもあり、その責任は、男性だけが木下・黒澤批評を独占した責任と等価に、やはり問われなければならないだろう。だが、＜女性映画評論家＞の多くは＜真っ向から作品に取り組む＞難しい文章を書くよりはおしゃれで華やかな洋画スター中心の記事を書くことをまず期待され、あるいは、それ以外のことは期待されていなかったし、もっと＜真面目な＞あるいは＜進んだ＞女性批評家にとっては、当時も現在もだが、日本映画には女性をがっかりさせる部分が多すぎ、日本映画を見ること自体を忌避したくなってしまふ、という状況がある）²⁷。

黒澤・木下の比較は、製作者の性別にかかわらず、作られたものが「雄々し」ければ受け入れられ、「女々し」ければ拒否される、

という図式のように見える。しかし、それならば男らしく論理的なものを描いた桐野などは賞賛されるはずなのに、実際は論理性の「ゆえに」不利益を被った。つまり、女が女を男らしく書いた桐野も、男が男女を女らしく描いた木下も、等しく蔑視される。男が男を男らしく描く場合のみが、無謬とされる²⁸。そして、これは女を解説者にすれば解決するような単純な問題ではないことも、石原の論説が明示している。なるほど映画であれ小説であれ、男に選ばれ、委託されて論説という晴れがましい場に出たと意識する女は、女という主語を多用し、「女性として共感できる」などのクリシェを繰り返すばかりなので、相変わらず論評の体をなさないのだ²⁹。言うべきことはただ一つ、この作品に普遍的価値があるかどうか、ということだけなのに。

3. 女性らしさと論理性の葛藤

1997年東電OL殺人事件なるものが世間を賑わした。被害者渡辺泰子は慶應義塾大学卒の東京電力の社員で、俗世間的な言い方をするならばエリートOLであったが、同時に渋谷界限で每晚売春を行っていた。事件現場も神泉のアパートの一室である。この人物にかかわる諸言説から、女性が論理的であることの社会との軋轢について簡単に考察してみたい。

この事件をノンフィクションとして上梓した佐野真一は、被害者女性の大学の指導教官にインタビューする。教授は彼女を「女性としては論理的で頭のいい人だ」と評したという³⁰。学問や業務遂行上の発話が論理的であることは一般に必要条件でしかなく、個人の特性や人柄を示す表現ではない。この言説の含意は、女性は一般的には論理的ではないが、比較的論理的な彼女は男社会に仲間入り可能であったという賞賛である。それでいて、男性を基準に考えたとき、それに優るほど論理的ではなかったし、それ以外の資質については保証しない、という限界も「女性として

は」が含意している。そういう環境に、いたのである。

彼女は経済誌への論文投稿などを積極的に行い、受賞経験もあり、理論派で知られていた。他方、同僚の女性からは「プライドが強く、協調性がない」と評された、と佐野は記している³¹。しばしば比較される、同期入社 of 東大教養学部卒の女性が自発的に制服を着て、お茶汲みなどに積極的に参加したのに対し、渡辺は総合職だからという理由で一般職の業務は拒否したという。知的能力さえ対等ならば、男性社会でも成功できるという素朴な信念が彼女を孤立させた。

佐野は、被害者女性がファザーコンプレックスで、父のように大企業で出世しようとして挫折した点を強調する。佐野はこの事件に強く「発情した」と明言してはばからない。「名誉男性」化を求めて失敗した女が、やはり自分には<女>としての価値しかないと悟って、娼婦となり、それでいて美人でなかったために墮落した…男性の優位性を確認するこの構図は、極めて男性を満足させる。だが、佐野は、被害者が優秀かつ努力家であったにもかかわらず会社で出世できなかった理由や、娼婦という極端な墮落の理由を具体的に何も説明しておらず、途中からは加害者として逮捕されたネパール人の冤罪事件や、事件担当裁判官の少女売春容疑に記述の重点を移している。いささか無責任な方向転換のなかに、そもそも<女>なのだからどう転落しても当然だ、という先入観をみる思いである。

佐野のノンフィクションから主な材料を取りつつ、完全なフィクションとしてこの物語を構成し直したのが桐野夏生の『グロテスク』である。本書は、上記の佐野のような男性的な視線とは対照的に、女たちが形作っていく自己像の病理性を内部からえぐりだす。主人公の佐藤和恵は、勉強も恋愛も、「努力」さえすればかなうと信じていた。中等部出身者と高校からの進学者の間に極端な差がある典型的な階級社会Q女子高に入学して、美貌や財力

といった切り札が何もないにもかかわらず、学園の華チアリーダー部への入部や二枚目のプリンスとの恋愛を一途に求める和恵の姿は、級友たちの侮蔑やいじめの対象となる。

和恵は大学卒業後、大手建設企業に勤める。保守的な職場では社会的成功と女性的魅力は不可分である。何歳になっても、優しさ、気配りなどの、求められる女性像に答えなくてはならない。有能さの条件をここで論理性一つに絞って考えよう。本来、「女性らしさ」と「論理性」は別個の資質である。だが「女性らしい女性は論理的でない」と思われているのに、社会で成功するには「女性らしく、かつ論理的でなくてはならない」。この矛盾のために、神経を遣い、労力を払わねばならない。論理的に論旨を展開させ、社会的視野から発言しつつも、個々の言説に愛情深さをちりばめて、そして控えめで温かく上品な洋服を着て、好感度が高まるよう演出する。かといって論理性や女性性を強調し過ぎても嫌われる。このバランスは絶妙で、敏感に切り抜けないと生き残れない。これを無意識的に体得しているのがいわゆる上流階級の子女であり、こうしたふるまいは文化資本として代々再生産される。そういうカテゴリーにはなく、そして本来的に鈍感な和恵のような人間は、女性自身から浴びせられる侮蔑や悪意の視線の中から、徐々に自己像を歪め、自分を追い詰め、「狂って」いく。桐野が描くのを得意とする女性固有の「悪意」というのは、単なる嫉妬やライバル意識ではない。社会原理への迎合の仕方が不自然な者に対する侮蔑とその存在の拒否である。女たちの日常は、絶妙な狂気の世界なのだ。和恵は言う。

〔会社の〕天井には蛍光灯が埋まっていて、あたしの顔色を青く冴えなくする。だから、いつも赤い口紅を塗ってはいけなくてはいけない。口紅とバランスを取るために、アイシャドウも青く。そうなると目と口だけが目立つから、眉も濃く描か

なくてはバランスが取れない。どんどんエスカレートするバランス感覚。バランスを取るのは難しい。でも、バランスを取らないと、この国では生きていけない。男に対する憧れと嫌悪。会社に対する忠誠と裏切り。あたしの中のプライドとマッド。泥のことだ³²。

4. 論理的であることの困難さと希望

アンジェラ・ヴァイプリンガーはドイツの「いばら姫」というおとぎ話を分析して、糸車の禁忌を「女性的なものの強さと運命に対する不安におののいている父権制の王国」と解釈する。ユング派の精神分析家である彼女は、女性の精神が幼い時から発育を阻害されている様を次のように述べている。

女性たちは、その本来の女性的な精神を、必ずしも生かしてはいない。現代は、知性による業績の突出した時代であり、少女たちもしばしば、世界を理解する男性的な方法のみを無理やり教えこまれる。彼女たちの本来の素質は精神的に発達させられず、排除され、問題にされない。それどころか、禁じられることさえある。女なら誰でも「女性的な思考の論理」にあびせられる皮肉な言葉や嘲笑をよく知っている。「女は方向音痴だし、論理的に思考することもできない。女の子には数学なんて無に等しい。そもそも女の子は知能が劣っており、コンピューターについて何も知らない。——なにしろ車のエンジンが前に付いているのか後ろについているのかもわからないのだから」。このように、女性的な精神は幼いときから発育を阻害されてしまう。[……] 人類が健全に生存しつづける唯一の可能性は、女性的な思考や女性的な精神が、生のあらゆる領域とすべての学問分野に流れこめるかいなにかかっている³³。

「女性的な精神」というと、男女の二項対立を本質的なものとして受け入れたうえで何が女性固有の精神なのかを考える必要が出てくるので、この句を「女性の精神」の意味でとらえ、「女性の、一人一人の思考や精神が、生のあらゆる領域とすべての学問分野に流れこめるかいなか」と解釈してよいならば、強く賛同したい。

1995年に東京都が行った男女の性差についての意識調査を見ると、「論理的思考は、男性のほうがすぐれている」と「女性は男性にくらべ、感情的である」、いずれの質問項目も、男性よりも女性の方がより高い数値で肯定していることがわかる³⁴。むしろ女性の方が「自発的に」受容しているのだからこれでいいではないか、という声が聞こえてきそうだ。「アメとムチ」であれ、古代ローマの市民権付与による忠誠競争であれ、過去の歴史の中で、どの社会においても、被支配者が自己の欲望に従って、自発的に支配体制に参加するような構造を支配者の側が念入りに作り上げてきたことを忘れてはならない。

「女は論理的でない」という言葉に囲まれていると、自分が論理的でありうるということに気づくのは困難である。気づくためには、実際に論理的思考を行い、それを口頭や文書で発表する場をもち、それが論理的であることが他人に確認され、それによってメリットを得、かつまたその論理的思考の美学のようなものを自身で体得していく必要がある。そのためには、論理的であることの利点や必要性を理解していなければならない。

論理的発話が可能な女性であっても、社会で発言する際に、そこに性別の役割期待の視線がある限り、「論理的でないこと」が望ましい雰囲気を感じ、しばしば情緒的な表現に代替させることを余儀なくされる。障害者などの他のマイノリティも同じ問題をかかえる。弱者として同情を誘うような言説を世間が期待しているなかで、対等かつ率直に要求や抗議を伝えるには勇気と技術が要求される。また日本語では、女性固有の話し方（「～なのよ」

「～ね」)があるので、仕事では異なる文体に切り替えなくてはならないことをより不利だと感じる者もいるだろうし、また、そうした社会の言葉づかいを「男の言語」と感じて、使用に際して「居心地の悪さ」を感じる者もいることだろう。歴史的に、男性の言語が普遍化されてきたのは事実だから。

また日常空間で用いられる女性特有の口語のなかには、「えー」「なんとなく」「わかんない」など、自分を思考から遠ざけるものが多い。代わりに自分の感性による価値判断があるように見えて、実のところマスコミの流す画一的な判断基準を受け入れているだけのことが多い。女性の主な居場所が家庭にとどまる場合は、母親や友人やテレビなどから受け継いだ女性的クリシェで自分の思考そのものを構成する。「あなた、仕事と私とどっちが大切なの！」は夫の侮蔑を誘う典型的な文句で、夫にとっては仕事も家庭も（妻は家庭の一部である）必要だ。彼は思う、二者択一をせまる「女は感情的で愚かだ」。ここで彼は、「自分の妻は愚かだ」とは思わない。自分の配偶者選択の瑕疵のなさや男としての自分の優越を確認するためには、妻の態度を女として一般化することが不可欠だ。その背景には、女は一般に愚かであり、しかも社会がわかっていない、という思い込みがある。そして彼は会社に行き、同僚たちに昨夜のことを語る。「そうそう、うちも同じ…」彼は仲間の共感を得るし、こうした言説がマスメディアに乗る（共感を得るのはあたりまえだ、あらかじめ問題を男女のそれとして一般化しているのだから）。ドメスティックな言説が「女性」という主体を作り出していく。本来彼女は、「仕事と私とどっちが」と言う代わりに、「円満な家庭生活の維持が必要だと思うのなら、平日は9時までに帰宅し、土日は専ら家庭のために費やすことを配偶者として要求する」とでも言うべきなのだが、そういう言説をこそ、男性は好まないだろう。「女は感情的だから話にならない」などと言って、喧嘩を終わらせることを希望する。女

性の側も、「さもないと離婚よ」などという切り札を出すほど経済的に自立していないので、クリシェの慣用的な使用にとどまってしまうのである。

ここで男女の言語使用の差について考えてみよう。日本語ばかりでなく、世界の多くの言語において男女は異なった様式で言語を使用する。それらを実際に記述することのほかに、「女性の社会的地位が女性発話にどのように影響するか」、そして「文化的思考や言語、性、力のモデルそして地位が言語使用にどのように意味を与え、言語行動を形成するか³⁵」などの解明が文化人類学や社会言語学に与えられた課題である。ボーカーによれば、アメリカでの男女の言葉遣いの差は、もっぱら社会階層の差に還元される³⁶。女だからではなく、社会階層が低いから、弱々しい特定の話し方をするのである。エイブラハムズによれば、アメリカの黒人社会では、女性の方が真面目で経済力があることと関連して、逆に女性は「はきはきと、ぬけ目なく話」し、会話において機知や機敏さを表す³⁷。18世紀にルソーはこう語っている。

それら〔女性の書く文章〕は、その著者に似てみんな冷たく愛らしい。その文章は大いに機知を示すことはあるだろうが、どんな形であれ魂を示すことはない。そして情熱的であるよりは、遥かに理性的である。女性は愛そのものを描くことも経験することも知らない³⁸。

熱い魂や燃え上がる愛を語るができるのは男だけだ、というルソーの主張は横におくとして（女も書けると思う）、男は感情的で女は理性的で機知に富む、という彼の説明は奇しくも現代日本の了解とは反対になっている。そもそも男は本当に論理的に話すのか？

キーナンはマダガスカルにおける男女の話し方の差異を研究し

て、男性は他人から公然と侮辱されることを避けるために「巧妙で遠まわしな発話」と呼ばれる間接スタイルを用いることを指摘している³⁹。またタンザニアのブハヤでは、「知っている」こと自体が社会的力となるので、男性はことさら「諺」を用いて語る⁴⁰。日本の男性もまた、公共の場でこのような話し方をしてはいないだろうか。「言わず語らず」の文化、つまり道徳や情で局面を判断することが要求されている日本の土壌こそ、論理性とは程遠い。たしかに、それぞれの社会組織がどのような言語を使用するかを決定するのであり、成員にとってその言語の習得は社会的な重要性をもつのだが、実のところ、日本の企業では、あるいは官公庁や教育機関でも、論理性は言語として選択されてこなかったのではないか。記述言語は多少論理的である必要があっても、作業言語に論理性は不要だったのではないか。だから「佐藤和恵」は大手建設会社で異言語を話す異邦人として疎外されたのではないか。

「男は論理的」「女は感情的」の背景にあるのは、数千年前からヨーロッパ文明が作り上げてきた、男性の側に「精神」や「論理」、そして人工的な創造や構築の「力」があり、女性の側には「身体」や「感情」、そして「自然」があるとする、男性中心主義的な二元論である。日本的な自然観、調和や瞑想の精神、そうしたものの擦り合わせることなく、安易にこの二元論を根付かせたため、日本では「論理性」もまた、論理的な手続きや思考の枠組みとしてではなく、ただたんに「西洋的」で「力」ある何かの表象として根付いてしまった。女性の側は、論理性そのものがよく理解できなかつたし、社会参加の必須要件でもなかつたので、これを求めようとしなかつた。筋道立てて理解できないものは、好んで生理的、感覚的、ゆえに漠然と本質的なもの、としてとらえ、表現することに安住した。こうして「論理性」という記号と、「論理的ではない<女>」という記号が作られた。

真理の論理において、女性的なものは、男性主体が規定した法とモデルの内部にしか生じない⁴¹。

人口の半分、日本でいうならば6000万人もの生身の人間に、同一の特性や嗜好を与えること自体に無理がある。〈女〉という主体は言葉としてしか存在しないのである。

本稿が女性学や社会学系統の論考としては初歩的なレベルにあり、過去の研究史や最新の研究動向を全く把握していないこと、論を単純化していること、用語の一つ一つがもつより複雑な側面の検討を怠っていること、などは承知している。しかしこの習作を通して、「女は論理的でない」という一つの支配的な社会的言説の実践が、女性のアイデンティティをゆがめつつ「真理」となっていく過程を、読者が少しでも具体的に理解し、どうすれば「真理」になるのを防ぐことができるのかを考えるきっかけを得るならば、それだけでうれしい。そういう願いをこめて、本稿を私のゼミの学生たちに捧げたい。セルトーの言葉で論を締めくくろう。

言語はもはや物を表しもしなければ、現前をもたらしもせず、言語はもはや世界の透明性ではないこと、そうではなくて言語はさまざまな操作を可能にする組織化されたひとつの場所だということである。言語はみずから語るものをあたえない。言語には存在が欠けている。だからこそ言語は操作することができるのである⁴²。

註

- 1 A.ピース『話を聞かない男、地図が読めない女』主婦の友社、2002。
- 2 たとえば同一分野における日本語の学術論文の男性著者と女性著者の論

理性の程度を数量的に比較することは可能だろう。ただし学術においては、女性も論理性を身に付けて参入しているという前提があり、女性としてはその前提を疑われたくないこと、また男性筆者においても論理性を欠く場合があるということを是認しにくいこと、から、研究者自身によるこの種の研究が実現されるとはあまり予想されない。

- 3 小学校の作文ならば男女同数あるので比較は可能で、学年別に論理性の男女差の傾向などを調べることができるだろう。ただし、大学卒業以降の文章となると、書かれ、残される率は男女間で大きく異なるだろう。
- 4 「法科大学院適性試験の実施主体としての「大学入試センターの適性」に関する当財団の見解」http://www.jlf.or.jp/pre_mogi/opinion200309.shtml (2004/01/24)
- 5 ただしここでの「本来的」とは必ずしも「生来の能力」という意味ではなく、大学院入学までに環境（家庭や学校）によって形成された論理性であるから、教養のインフラストラクチャーの質を国家が問うという構造になる。
- 6 たとえば、ふわふわした赤ん坊をさわるのは、気持ちいい、楽しい、だから赤ちゃん大好きよ、ついでにあなたもあなたも大好きよ。このような肯定的な身体イメージから自ら愛情深くなる女性も多いだろう。一方で、本来的に自分には愛情がある「はず」なのに、その発出がなくて苦悩し、育児ノイローゼや幼児虐待に陥る女性も少なくない。cf. E.バダンテール『母性という神話』ちくま学芸文庫, 1998／中嶋公子「母性愛幻想の歴史」『大航海』5, 1995, pp.96-103.
- 7 「女はバカだ」という言説は企図があからさまなので少し抵抗があるが、「非論理的」は意味がよくわからないのでそれほどショックではない、といえる。
- 8 「いじめ」や「ひきこもり」も、言葉そのものが現象を増加させている。
- 9 むしろ論理と感情が両立しないと理解こそ奇妙である。グラン・ロベール仏辞典によれば、「論理的な」logiqueの対義語は「不条理な」absurde, 「非論理的な」antilogique, illogique, さらに「無分別な」déraisonnable, 「一貫性のない」incohérent, 「筋の通らない」inconséquent.
- 10 ボールズ／ホーヴェラー『フェミニズム歴史事典』明石書店, 2000, p.174.
- 11 上野千鶴子『発情装置』筑摩書房, 1998 が「対幻想」については詳しい。
- 12 自分より背が低い男しか恋愛対象にならない、という知人の女性がいる。理由を聞いたら、いつも相手を見下す感じでないといやだからだ、とい

う説明だった。

- 13 Pierre Bourdieu, *La domination masculine*, Seuil, 1998.
- 14 筆者は、そもそも「女は感情的」「女は非論理的」などの言説は、戦前の遺物だと思い込んでいた。ところが最近、実際に職場でこうした言説を聞く機会を得て、この「物語」がアクチュアリテなのだと思います。執筆の動機の一つである。
- 15 桐野夏生『錆びる心』文春文庫, 2003, p.244.
- 16 同上 p.26.
- 17 一般に巻末の解説は、読まれる率の高さという意味において、特化された文芸誌に掲載される書評の類よりも、大きな影響力をもつ。読書感想文やレポートを書く際に学生たちが参照し、多くの場合そのまま引用する。
- 18 大塚英志『キャラクター小説の作り方』講談社現代新書, pp.63-91.
- 19 個人的には「ごうつく女」「肝っ玉かあちゃん」などを主人公とする小説を待望している。またマンガのヒロインは相変わらず「素直で、愛情深く、おっちょこちょいで、結婚を夢見る、美人ではないが可愛い子」が支配的である。日本マンガの世界進出が著しいが、少女マンガの輸出が芳しくないのは、こうしたヒロインの類型が人工的で、自立した欧米の女性にとって理解困難だからだと考えられる。少年マンガの場合は「成功」「勝利」といった男性原理なので、各国とも受け入れやすい。またフランスの若年層の一部では、しばしば『きまぐれオレンジロード』など少女を主人公とする日本の少年マンガを《Shôjo》つまり少女向けマンガとして受容する現象も見られる。
- 20 牛山恵・田近洵一『国語教育の再生と創造——21世紀へ発信する17の提言』教育出版, 1996（本書未見につき、斎藤美奈子編『男女という制度』岩波書店, 2002, p.272より引用）。
- 21 斎藤美奈子『紅一点論』ちくま文庫, 2001.
- 22 L.ジョーダノヴァ『セクシュアル・ヴィジョン』宇沢美子訳, 白水社, p.110.
- 23 桐野夏生『O U T 下』講談社文庫, 2002, pp.338-339.
- 24 「解体全書桐野夏生」『ダ・ヴィンチ』2001年9月号, p.168.
- 25 YAHOO !BOOKSより <http://books.yahoo.co.jp/featured/interview/20040122yanagihara/01.html> (2004/01/24)
- 26 もし男性が、「知的で理系的で魅力的なこの人は男性？と思いきや素敵な女性だった」と述べたならば、あからさまな自画自賛になるし、こういう場で「男性」という表現は使わないだろう。
- 27 石原郁子『異才の人 木下恵介』パンドラ, 1999, pp.36-37.

-
- 28 作者自身が名誉男性の要件を満たす場合、女が女を女らしく描くことも、かなりの頻度で受け入れられる。
 - 29 日本のテレビにおける女性アナウンサーは、しばしばニュートラルな文脈に「女は」という主語を持ち込んでコメントすることで、言説の主体が本来男性であることを逆に強調するジェンダー的役割を担う。アメリカのアンカー・ウーマンのようなプロのジャーナリストの場合には、そのような傾向は観察されない。
 - 30 佐野眞一『東電OL殺人事件』新潮文庫, 2003, p.497.
 - 31 佐野眞一『東電OL症候群』新潮文庫, 2003, p.432.
 - 32 桐野夏生『グロテスク』文藝春秋, 2003, pp.405-406.
 - 33 A.ヴァイプリンガー『おとぎ話にみる愛とエロス』入江良平／富山典彦訳, 新曜社, 1995, pp.110-111.
 - 34 江原由美子／山田昌弘『新訂 ジェンダーの社会学』放送大学, 1999, p.24.
 - 35 R.ボーカー「文化人類学：社会的文化的展望」(『文学と社会における女性と言語——言語表現と性差別』サリー・マッコーンル＝ギネット他編著, 弓書房, 1989) p.41.
 - 36 同上 pp.43-44.
 - 37 同上 p.56.
 - 38 Jean-Jacques Rousseau, *La lettre à d' Alembert sur les spectacles*, Garnier-Flammarion, 1967, pp.199-200/ 訳文は ペギー・カムフ「女性らしく書く」(『文学と社会における女性と言語』上掲書) p.225 による。
 - 39 R.ボーカー「文化人類学：社会的文化的展望」(上掲書) p.57.
 - 40 同上 p.60.
 - 41 L.イリガライ『ひとつではない女の性』小野ゆり子訳, 勁草書房, 1987, p.105.
 - 42 M.ド・セルトー『文化の政治学』山田登世子訳, 岩波書店, 1990, p.93.